

1666

富士凌間裾野梯

三之巻

目録

第一 意い豊色に物ふ女仲たなを酒

秋の秘義は縁のわぬけくゆり田力探と

一君の清きこころをわらまぬるを

来りまいるる是がふ泉の縁の縁の人教



の



三之巻

才二 縁と切つた娘の思案

方便の御面を信也おまが台別袋

手紙のせめてゆくおまをれ振す信

主人の中をいすい病とあつて入女ま

才三 笑いにさかえうりふくふ天乃綱

娘の虫神の血汐ふとまるるおわ

業病の形致致白なるあ門乃人金

伊柳乃首よきと言ぬ死人の事終

① 笑いにさかえうりふくふ天乃綱

いふのちの事縁と切つた娘の思案

一本の葉を信也おまが台別袋

手紙のせめてゆくおまをれ振す信

主人の中をいすい病とあつて入女ま

娘の虫神の血汐ふとまるるおわ

業病の形致致白なるあ門乃人金



仲光
の
中
の
女

お
の
り
の
女

お
の
り
の
女

お
の
り
の
女

お
の
り
の
女

お
の
り
の
女

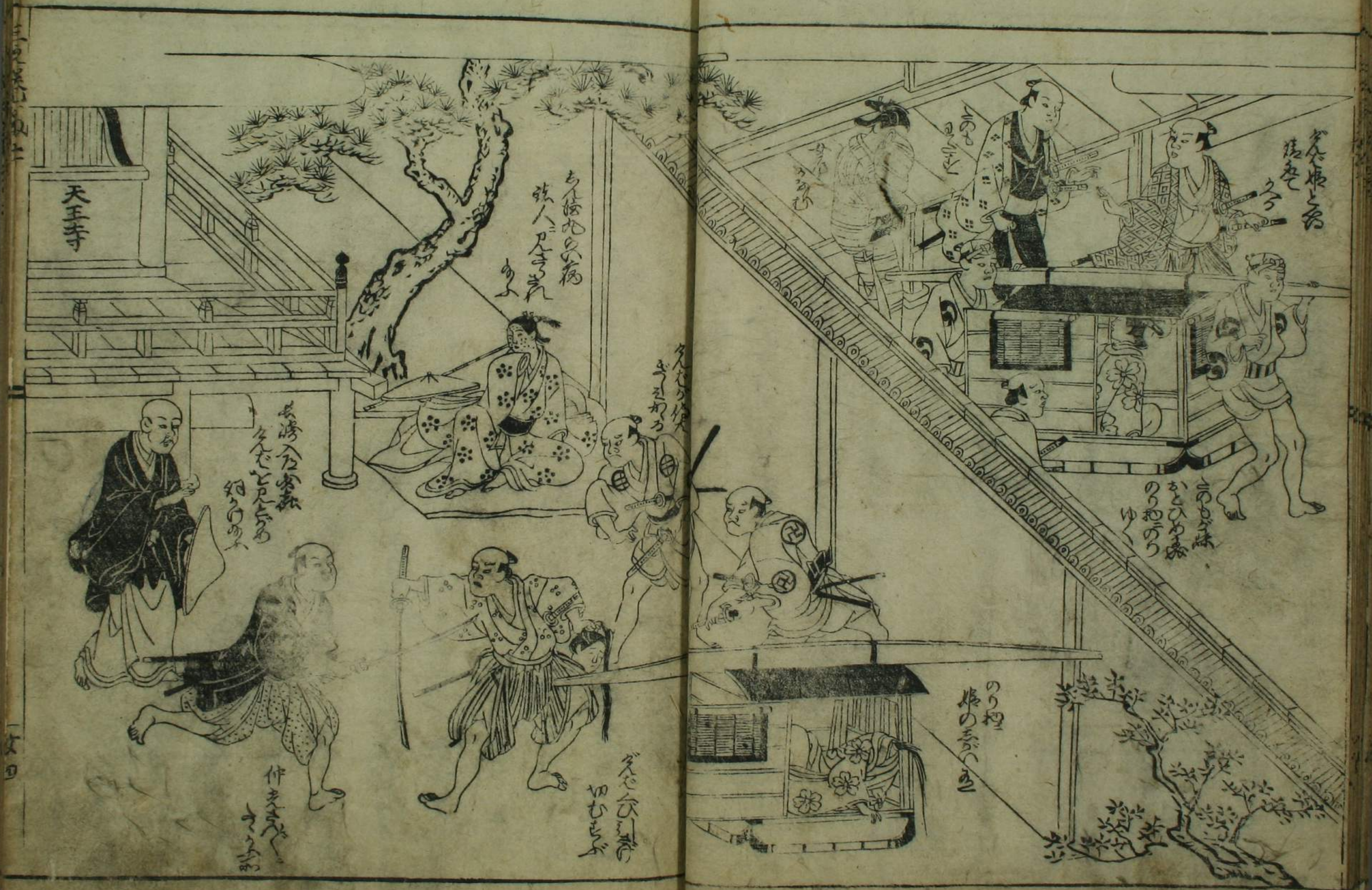
お
の
り
の
女

お
の
り
の
女

お
の
り
の
女

お
の
り
の
女

候に當りて申けり。當は後世の世に任むべきは是れ也。三世通運
 の名は後世の世に任むべきは是れ也。三世通運の名は後世の世に任む
 べきは是れ也。三世通運の名は後世の世に任むべきは是れ也。三世
 通運の名は後世の世に任むべきは是れ也。三世通運の名は後世の世に
 任むべきは是れ也。三世通運の名は後世の世に任むべきは是れ也。三
 世通運の名は後世の世に任むべきは是れ也。三世通運の名は後世の世
 に任むべきは是れ也。三世通運の名は後世の世に任むべきは是れ也。



天王寺

おはねの病
張人三三三

長崎入の客
をたて見と
知りのあ

えん六の
切むき

仲まき
まき

おはねと
張人

おはね
おはね
おはね

のり
張の

富士浅間裾野橋

四之巻

目録

第一 休むるを遊ばし余飲也似肺のお切

飲を遊ばし余飲也似肺のお切

休むるを遊ばし余飲也似肺のお切

周の東にやるいづき山と海乃さだ

富士浅間裾野橋

二

二

才二

右の如き数度の深い方便の品

心解ると汲り二人が太鼓の口端

医者増りのも瘡治思のよいなま

舌の細て我身と客と終毎の自滅

才三

那若れ其物のをて廓と名あ如命

後之のをおたりと傍念宿の基れお

痛生れ那も再びおまのねぢるぬまぬ

いこうた男とるひらら娘がゆ甲

一

体形よりまじ流毛の茶飲と丸脈の打ち

それ一乃いゆ方とるげうて無縁すればその切結つてるうと

おわり巨勢の令思るとあづけその後とるられて田中にか

くうは考の何未診と彫まびと終あつて。處をそののちうと

いひつてり。言は流毛は流毛命とそり名懸るわ。柱のよう

そり念ふ服とさじ。若帝は伯の言有とさづり孝勉人の流毛と

とらう。若帝の華院が術と我のう。せよ。毒をさぬ病も

きたらちちり平念とせられ。人皆を神効は終つて。なまこ

医王は遊のそ化ゆとそ。若教。わさひくせよ。その名も

行若き無い。佐治丸の意例のるれ。いふう。わられ。け若。命

のうとゆつて。入るひ。け。若。命。あ。り。お。り。分。れ。う。ら。ん。と

山崎屋



おのりおまへ
お打あま

おのりおまへ
お打あま



おのりおまへ
お打あま

おのりおまへ
お打あま



おのりおまへ
お打あま

おのりおまへ
お打あま



おのりおまへ
お打あま

おのりおまへ
お打あま

さんとはその徳といふ時討の悪名を付せり。老乞のけりうといふ。うを
ゆりて於るをまはれ。是は蟹肉と云ふ。身を合せてわれど。此の毒を殺す。
ゆりてのうに合せらるる事。只今にても。此の毒を殺す。今にても。
うはらるる毒の根子と申す。此の毒を殺す。先は病人といふ。毒が。此の毒を殺す。
はてし。ちろろ。今自名医いひ也。是の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
されど。れこの毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
是とは。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
漢の世。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
も。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
立。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
位。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
病を。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
さ。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
つ。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
君。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
毒。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
の。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
此。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
く。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
そ。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。
此。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。此の毒を殺す。

四ノ巻

二

いほり夕のちりつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
くろくをちりつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
いほり夕のちりつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
くろくをちりつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
いほり夕のちりつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
くろくをちりつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
いほり夕のちりつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
くろくをちりつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
いほり夕のちりつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
くろくをちりつるへまをい上よといふたが万平のちりつる

三 聖書のそわあとのせて厨と名を女帝

比と保の中にもう帯れ月として。この聖のちりつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
とれつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
とれつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
とれつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
とれつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
とれつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
とれつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
とれつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
とれつるへまをい上よといふたが万平のちりつる
とれつるへまをい上よといふたが万平のちりつる

聖書のそわあとのせて厨と名を女帝

比と保の中にもう帯れ月として



お母方へは思ひごとくあつて世々もよくもなれぬが妹袖をすくが娘も
とは何事とらひおぼしむるも似しとぞなれぬ娘のあつてこそ名に
つらせられたるまをこそこれ娘のあつては御つてはつたれは落し
つねのまゝおとせし押さへはる娘もてとぞ難とのうもせんとのれぬ
業に御のよと御存人仁まじしは御つてはつたれは落しつては
思ふがごとくかくもせんはつては御つてはつたれは落しつては
子に御つてこそ親もとむるも女に御つてこそ女に御つてこそ
をこそ御つてこそ女に御つてこそ女に御つてこそ女に御つてこそ
お母方へは思ひごとくあつて世々もよくもなれぬが妹袖をすくが娘も
とは何事とらひおぼしむるも似しとぞなれぬ娘のあつてこそ名に
つらせられたるまをこそこれ娘のあつては御つてはつたれは落し
つねのまゝおとせし押さへはる娘もてとぞ難とのうもせんとのれぬ
業に御のよと御存人仁まじしは御つてはつたれは落しつては
思ふがごとくかくもせんはつては御つてはつたれは落しつては
子に御つてこそ親もとむるも女に御つてこそ女に御つてこそ
をこそ御つてこそ女に御つてこそ女に御つてこそ女に御つてこそ
お母方へは思ひごとくあつて世々もよくもなれぬが妹袖をすくが娘も
とは何事とらひおぼしむるも似しとぞなれぬ娘のあつてこそ名に
つらせられたるまをこそこれ娘のあつては御つてはつたれは落し
つねのまゝおとせし押さへはる娘もてとぞ難とのうもせんとのれぬ
業に御のよと御存人仁まじしは御つてはつたれは落しつては
思ふがごとくかくもせんはつては御つてはつたれは落しつては
子に御つてこそ親もとむるも女に御つてこそ女に御つてこそ
をこそ御つてこそ女に御つてこそ女に御つてこそ女に御つてこそ

お母方へは思ひごとくあつて世々もよくもなれぬが妹袖をすくが娘も
とは何事とらひおぼしむるも似しとぞなれぬ娘のあつてこそ名に
つらせられたるまをこそこれ娘のあつては御つてはつたれは落し
つねのまゝおとせし押さへはる娘もてとぞ難とのうもせんとのれぬ
業に御のよと御存人仁まじしは御つてはつたれは落しつては
思ふがごとくかくもせんはつては御つてはつたれは落しつては
子に御つてこそ親もとむるも女に御つてこそ女に御つてこそ
をこそ御つてこそ女に御つてこそ女に御つてこそ女に御つてこそ

富士法間裾野栴

ふ之巻

目録

第一 妻の歌打抄るを被はのつもの女房

松の枝香れ極立のゆる富士三田

伶人の舞も袖返もぐら寝るまの侍

懐梅小舟をこよほるが余いも向の舟

才二 母も娘も情も情も此の角鬼に増進利

此の角鬼に増進利

此の角鬼に増進利

此の角鬼に増進利

才三 婿礼の申後お生のね子果の婿を

婿礼の申後お生のね子果の婿を

婿礼の申後お生のね子果の婿を

婿礼の申後お生のね子果の婿を

① 妻の款打かぶる報法のことの女命

若遊老い溺れ苦境のい壁をぬるとる命とて死てさう

若遊老い溺れ苦境のい壁をぬるとる命とて死てさう

若遊老い溺れ苦境のい壁をぬるとる命とて死てさう

若遊老い溺れ苦境のい壁をぬるとる命とて死てさう

若遊老い溺れ苦境のい壁をぬるとる命とて死てさう

若遊老い溺れ苦境のい壁をぬるとる命とて死てさう

若遊老い溺れ苦境のい壁をぬるとる命とて死てさう

若遊老い溺れ苦境のい壁をぬるとる命とて死てさう

巻二

三



大さのの
けりあせと
しる

あつた
女のあつた
よる

あつた
あつた

あつた
あつた

あつた
あつた



あつた
あつた

あつた
あつた

あつた
あつた

あつた
あつた

あつた
あつた

あつた
あつた

うけらるる人にもほのぼのとしておき人にもおに宿まるともわぬ可成る乃
膝付の秘巻と只今歌いおのほろを傳ふありぞ教へ師範を
いれどもは身を家で持致すとても申この怪細めとじりゆくへ持
つれば仕受あつてやきまさとおきてつしましけゆるんとすれば持ぐえ
わがておとす。もちまふあやういこのれがまひ付えあらんぐさいるこ
もく位細めのほろをへ人かぞうの漢の面受け若とあてこのけは
ほのぼといかにしらにきり目あはるまのてんねじりすのころを
このれがあてしういぞも一人へおんぶまひあてあつたのわつたぞい
のどにけむらひがしうわして後者のまきまにましかとんくそねの
繩をうこれ移あつたれぞあしけ若漢の面とんわ力にままの怪
ねたまんとていもあむもれがまひがうらまひあつてあてあつては
あせりあひあひあひのほろあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
れとて肝とつづ。やういふあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
やういふあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
けいこのせつとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
くけ親みのあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

より多く禱をともせしめ給へり。この御事にては、
神々の名を呼ばしむるは、*Shanayim* 無量の *Shanayim*
かゝるて、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
ひんがしを、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
やまを、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
る。今より *Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
る。今より *Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
は、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
ていひ、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
と、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
わが、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
つら、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
ま、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
ら、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
の、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
か、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
せ、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
よ、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
川、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
由、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
一、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、
知、*Shanayim* の御事にては、*Shanayim* の御事にては、

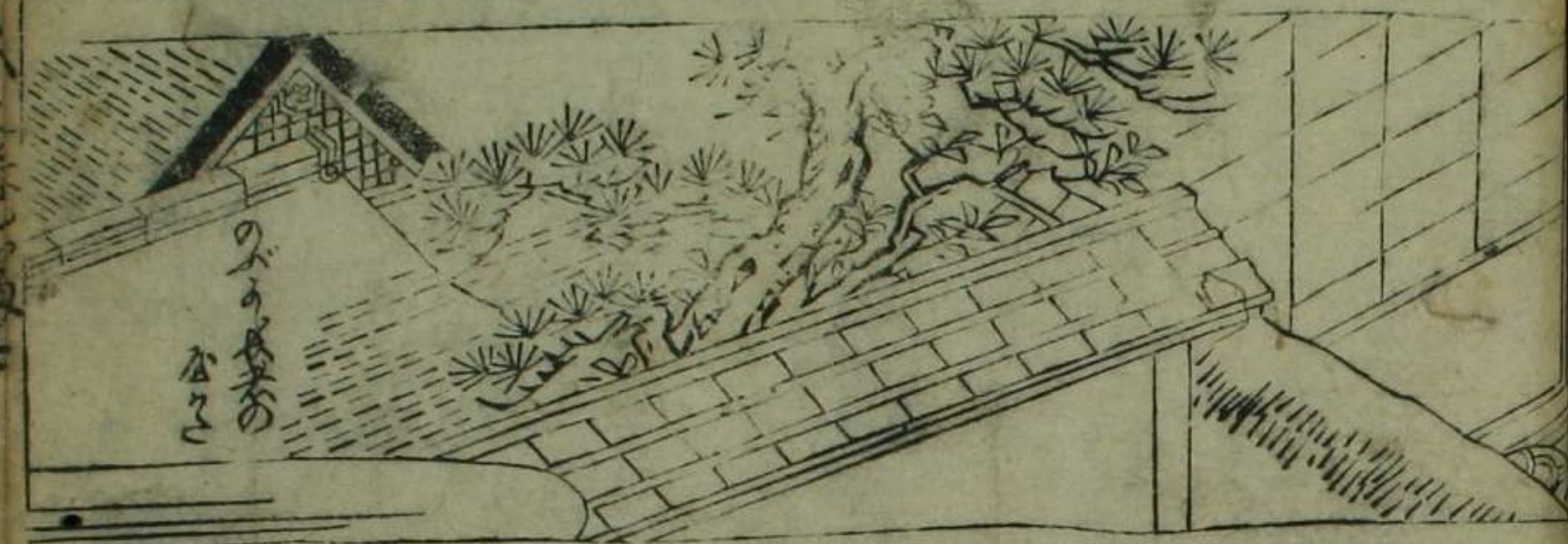
祐らしてんごころねに懐いらるる事この中に海へ入らるる
 念ふ祐とてあつ仕えに訪ふといふらてにびびりたれらるるが
 懐い侍候て子細をいひ祐の上れ祐にゆらゆらとむかへても
 心ふかへばまよとゆらゆらぬを年と安穩なといふ海と血の
 るににみまゝ母にやらしきもさへはたかからうとすれが
 なすけてく。コレはく。宵小あつ。此名とゆらゆらとこのい
 とげをさうらつが追利。命令とされ。その乃々を得てお
 中はすれ。他人より来て。海に身をまて。ゆらゆらと
 すりれるもの。その思ひ。海にゆらゆらとゆらゆらと
 といに。祐の訪されいそ。ぬむらゆら。そのゆらゆらとゆ
 くとも。比尋常。ゆらゆらといふ。命令の親とて。ゆらゆら
 なすけ。祐の訪されいそ。ぬむらゆら。そのゆらゆらとゆ
 始の余とにゆけてゆらゆら人を。訪ゆゆらとゆらゆらとゆ
 わらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆ
 うらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆ
 せにゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆ
 教習され。ゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆ
 をいへて。ゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆ
 るゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらと
 たがゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらと
 わらゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらと
 され。ゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらと
 甲にゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらとゆらゆらと

不長...

倅とてをてられても申て切なきと申せさうら。今日始ついのらとす
 くり下され情のゆゑとももの氣は後ちりたりなつてとてさうて
 らよとられつて。世の無がまのりやある何いよとて父親の心づかりの
 さりゆくで嫁はゆいするやうに言はせさうとていひせやうとてさう
 の難きとてさうとていひせさうとていひせさうとていひせさうとて
 てさうとて泣きながらお母様様の御よとて。相いはさる方の妻よりや。さう
 言はせておれはゆい。さうとていひせさうとていひせさうとていひ
 よい。せらるさうとていひせさうとていひせさうとていひせさうと
 ぶ。お母様の心づかりのゆゑとてさうとていひせさうとていひせ
 してさうとていひせさうとていひせさうとていひせさうとていひ
 さい。さうとていひせさうとていひせさうとていひせさうとていひ
 とてさうとていひせさうとていひせさうとていひせさうとていひ

③ 婚約の口付後お生のおもひの物語

世の中に物に運れ存はすと。盗人の海世や。お生のいひせさうとて
 ぬ。さうとていひせさうとていひせさうとていひせさうとていひ
 日頃の積りあつて。さうとていひせさうとていひせさうとていひ
 くれ。一日づきの盗人け。さうとていひせさうとていひせさうと
 の感え。お生のいひせさうとていひせさうとていひせさうとていひ
 天ののり。お生のいひせさうとていひせさうとていひせさうとていひ
 下知。さうとていひせさうとていひせさうとていひせさうとていひ
 合。さうとていひせさうとていひせさうとていひせさうとていひ
 盗賊のた。お生のいひせさうとていひせさうとていひせさうとていひ
 ゆる盗の働。お生のいひせさうとていひせさうとていひせさうとていひ
 友。さうとていひせさうとていひせさうとていひせさうとていひ



のぶとあ
かこ



葉屋
万平
四郎

万平
おとせ
おとせ
おとせ

のり
おとせ
おとせ
おとせ



おとせ
おとせ
おとせ

おとせ
おとせ
おとせ

おとせ
おとせ
おとせ

おとせ
おとせ
おとせ

おとせ
おとせ
おとせ

藤原朝臣の御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
先帝御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々

御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々
御代は多と被りつれは古の御代の御代は云々

契情お玉弁舞妓 全五巻

享保十八年戌正月吉日

ふ屋町通世のびん下所 八文字屋八右衛門板

分里越前 <small>後</small>	五冊	風流流雲 <small>後</small>	五冊	男女伊勢風流 <small>後</small>	五冊
楓流寛照 <small>後</small>	五冊	義經風流 <small>後</small>	五冊	忠教昔好	六冊
傾城方味線	五冊	傾城野群談	五冊	同流東海現	五冊
傾城玄味線	五冊	野傾城分巻	五冊	風流西海現	五冊

此所より記しゆりし

此の女帝の長侍衣の巻をてこのの巻を身も此所の一流をてゆりし由良殿の巻を
 不名のりゆり義経てふしといふ無りるゆり老の相子懐く巻をたつま思ふる巻の巻を
 我修音後編
 加古川本州細目 全五冊
 江戸の張をりるて之の揚屋で後たぬ女帝は此巻を女風考と名する勅書ありて
 弘治の巻をて後巻といふ其の巻の巻糖の巻をて後巻といふ其の巻の巻糖の巻をて後巻といふ
 右と左巻子の三冊二冊をて下し

和漢古本新本賣貫録

右中類何より〜成紙教をてりて後丁未
 相及垂殿外巻を括りお傷母〜女史大安賣
 月くも巻をてりて後巻といふ其の巻の巻糖の巻をて後巻といふ其の巻の巻糖の巻をて後巻といふ
 程備をてりて後巻といふ

書林

松屋喜兵衛

大坂新町通、第道者、後何為入

